

【はじめに】

院外処方せんは年間約 2 億 4000 万枚を突破し、薬剤師を取り巻く環境は急激に変化している。従来から薬剤師に求められてきた処方せんどおりの正確な調剤、相互作用、副作用のチェック等の業務から、かかりつけ薬局としてファーマシューティカルケアを実践するという目的に為ける服薬指導の重要性が言われるようになり、そのための薬歴の存在価値を改めて実感させられるようになった。

そこで、当薬局では、今までの散漫な記録であったところの薬歴から、ファーマシューティカルケアの実践のために科学的に整備された記録である POS による薬歴への移行を試み、現在実践中であるので報告する。

【POS という考え方】

POS とは、“Problem Oriented System”の頭文字をとったもので直訳すれば、“問題志向型システム”である。この POS は、ファーマシューティカルケアの具体的実践のためのひとつの非常に優れた技法である。具体的には、患者さんから得られた情報によって薬物治療上の問題点を見だし、その問題点ごとに情報や実施された内容を SOAP に振り分けて記録していく。

S: Subjective 患者さんが提供する主観的情報

O: Objective 処方せん、添付文書、検査値等客観的情報

A: Analysis, Assessment 薬剤師の分析、評価

P: Plan 問題点を解決するための計画、手段、技法

【まとめと考察】

POS による薬歴管理業務

(利点)

1. 漠然としていた服薬指導からファーマシューティカルケアの精神で、患者さんの問題点を見だし解決しようとする姿勢で患者さんに接するようになる。
2. 他のスタッフが次にその患者さんに接する場合などの問題点が明確に示されており、それまでの経過と今後の方針が理解しやすく、的を得た服薬指導ができる。

(問題点)

1. 通常の薬局業務では 1 人 1 人の患者さんに十分な時間をかけられないことがあり、情報量不足で問題点把握に手間取ることがある。
2. 記録に時間がかかる。1 人薬剤師では無理な点もある。
3. 服薬指導で薬剤師の介入できない部分もある。

ファーマシューティカルケアにおいて薬剤師に求められている役割とは、患者さんの持つ問題点を明らかにし、セルフメディケーションを確かなものにさせ、QOL の向上をより具体的に実践させることであると考えます。つまり患者さんが今どの薬を、何のために服用し、どのようなことに注意を払い、その結果どうなっていくのが望ましいのかを理解させることである。これらの一部に支障をきたすのが患者さんの持つ問題点といえるのではなかろうか。その問題点を解決し、どのような結果を服薬指導によって導きださなくてはいけないのかというゴールを設定し、1 人 1 人の患者さんに接していくことが重要であり、それを可能にする最も優れた手段が POS であると考えます。当薬局においてもまだまだ試行段階であり、不備な点が多分にある。今後も改良を重ね、将来的には在宅医療等に応用していきたいと考えている。